別紙

べたべた対ねばねば対いぼいぼ

しゅるるるる・・・・・・不気味な音が近づいてきた。荒涼とした砂漠のような地面に恐怖の粘液をぶつけながら、ねばねばがやってきたのだ。

地面いっぱいにどろりとひろがっていた褐色の液体がゆるゆると立ち上がり、姿を整え始める。ねばねばの近づく気配に、べたべたが目を覚ましたのだ。べたべたは巨大な黄土色の波の如く、ねばねばの行く手に立ちふさがった。ぷしゅーーっ。べたべたの口から、死の「べたべたミルク」が飛んだ。危うくこれを躱(かわ)したねばねばは、相手を手強しと見たか、べたべたのまわりを威嚇するようにまわり始めた。ぴゅっ。ぴゅっ。ねばねばの触手がすばやく伸びて、べたべたのからだに死の宇宙病原菌を植えつける。しかしべたべたのからだの強酸には通用しない。べたべたもミルクを乱射、あたりは黄緑色のねばねば液と乳白色のべたべたミルクがまき散らされ、混ざりあって美しくも恐ろしい光景をかもし出す。

と、その時巨大な物体が飛来して、円を描いてまわっているねばねばと真正面から衝突した。100mもはじきとばされるねばねば。その物体は地上に落下し、とたんに濃紫色のガスを吹き出した。いぼいぼである。瞬間、あたりは目の前も見えぬ濃い紫の霧に包まれた。ぐるぐるぎゅーーっ。べたべたのからだに、さっと橙色の縞が走った。続いてピンク色の渦巻が現われ、つぎに全身蒼白と化し、あずき色になり、ぷすぷすと音をたてながら徐々にちぢんでいった。恐るべき「いぼいぼガス」。その微粒子は瞬間的にべたべたの全身にとけこみ、その組織を侵したのである。

はじき飛ばされたショックから立ち直ったねばねばが今度はいぼいぼのまわりをまわり始めた。いぼいぼは再び死の「いぼいぼガス」を噴射した。しかし同時にねばねば液をたっぷり含んだ触手がいぼいぼの全身にからみつき、いぼのひとつひとつを残らず黄緑色に染めた。ぴゅるるるるっ。いぼいぼガスの威力は迅速だった。ねばねばのスポンジのようにやわらかいからだが瞬時に硬直し、触手の動きが止まった。そして、ねばねばの球体は黄緑色の粘液の上でしばらく静止していたが、やがてゆっくりとその中に沈んでいった。が、一方いぼいぼの体内にも、皮膚を通して血液中に死の病原菌が着々と侵入していた。

ぶふっ、ぶふふふっ。全身黄緑色の粘液で斑(まだら)に染められたいぼいぼは弱々しく吠えた。早くも水腫性ペスト菌が血液中の栄養分を毒素に変質させ始めたのだ。いぼいぼはふらふらと飛行し始めた。しかし、その余命も1日ともたないであろう。